

# お寺の社会性

—生奥坊主のつおやき—

拾六

竹中尚文

今回は、この原稿を書く準備の時間が足りなかったので、私たちの専光寺のボランティア活動をして下さった方への礼状を転載したい。その内容は、前々回の話しと重なるかもしれないが、ご容赦願いたい。

この度は専光寺仏教婦人会のいなり寿司作りと、その配布にご尽力頂き、ありがとうございました。心より御礼を申し上げます。ごちそうさまでした。

30年以上前のことですが、日本文学を研究しているアメリカ人学者が、「ごちそうさまの意味を知っているか?」「いま、あなたが食べた食事について、いろんな人々が走り回ってくれたことへの感謝なのだ」と教えてくれました。同じ頃、京都や大阪の商店で何も買わな

った私が店を出る時に店主からかけられる「おおきに」という言葉の意味も知りました。店主は、客が店を訪れたことによる「御縁」に感謝をしているのだと言うのです。

今、私はいなり寿司を作っていたことに対して、「ごちそうさま」と「ありがとう」と申し上げます。

ところで、御仏飯のお下がり(お下がりとは、仏様にお供えをした品物を供え終わって下げた物)と御仏飯米で、ホームレスの人々にいなり寿司を作ること疑問をお持ちの方もおいでになるようです。その疑問の根底には、ホームレスの人々の現況が自業自得であるという見解から来ているように思えます。人生は自らの努力によって開かれるという人生観でありましょう。確かに人生は、自転車を漕ぐようなもので

努力を怠ると倒れてしまうものです。しかし、倒れる者が全て怠け者であるとは限りません。人生はそんなにシンプルなものではありません。現在の私は、これまでいろんな人たちに助けられて生きて来ました。私だけの力で生きてきたのではありません。あの時、あの人に出会っていなければ、今の私はとても存在しないだろうと思う人もいます。人生は氷の上を歩くようなものだとも思います。どこが厚いか薄いかは分かりません。いつ、私たちは薄氷を踏み抜いて深みに墜ちていくのか分かりません。

私はいろんな人のお葬式に出ます。亡くなられた方の人生を振り返り、「人生、山あり谷あり」と言いますが、ほとんどの人生が「谷ばかりで、ほんの少し山があるだけ」であるように思います。どの人生も苦と楽の収支は合わないものです。

最近、こんなお葬式がありました。亡くなったのは28歳の青年です。夜の間、心臓麻痺で亡くなっている息子さんを、お母さんが発見しました。全く予期せぬ死でした。悲嘆

というような言葉では表せない悲しみでした。このご両親は一生懸命に働いて子供たちを育てました。ずいぶん苦勞もあったと思います。しかし、どれ程の苦勞をしようとも、この出来事に比べれば何事でもないと私は思います。

お葬式の間、私は「このご両親が何をした？これほどの報いを受けるようなことなどしてこなかった。この息子さんもここで命を絶たれる程のことなどしなかった」と思っていました。それぞれの人生にもたらされる出来事に対して、自己責任と言い放つ人たちがいます。生まれてきたこと、死んでいくこと、そこで言われる自己責任は浅薄な言葉です。

この青年の七日参りに、近所に住むお婆ちゃんがお参りに来ました。そのお婆ちゃんは、数年前、80歳の時に息子を送りました。爾来、お婆ちゃんは悲しみを噛みしめるように生きてきました。お婆ちゃんは「私はお参りに行く」という強い意志で歩いてきたのだと思います。どんな言葉が交わされたか分かりま

せんが、このお婆ちゃんは悲しみに寄り添う姿でした。この姿を御同朋（おんどうぼう）と言います。同胞ではありません、同じ友達なのです。悲しい時、つらい時、苦しい時、悲しみに寄り添ってくれる友達はありがたいものです。

御同朋の社会というのは、仏様と人の繋がりによる社会であり、言い換えれば仏様の御縁で結ばれた社会なのです。この繋がりの中で我々は生きています。いま、あなたが仏様のご飯でいなり寿司を作るとい

う援助の手を差し出してくださいました。手を差し出したあなたの背後で、仏様が微笑んでいるかもしれません。悲しみに始まった御縁かもしれませんが、悲しみだけで終わらせないのです。この御縁に私は改めて「おおきに」と言います。あなたも「おおきに」と言うかもしれません。仏様も「おおきに」と言うかもしれません。そこには感謝と喜びの南無阿弥陀仏があります。